

巻頭言

Foreword

オリジナリティーと多様化に挑む

Meeting the challenge of innovation & diversification

堀場は、創立いらい分析機器の専門メーカーとしての道を歩んできた。そもそも、分析機器というのは、科学技術発展の影のプロモータ的な役割を受け持つものである。たとえば、半導体検査用分析計、医用分析計、煙導用分析計と呼ばれ、それぞれの領域において一つの道具としての仕事をしてきた。道具とはいえ、分析機器が果たす仕事は、科学技術の発展に欠くことのできない最も重要な支えである。分析機器に必要とされる技術は超薄膜技術、超高真空技術、微細加工技術など多岐にわたっており、それぞれが各時点、各領域の最先端でなければならない。日本の産業界の中でも世界に冠たる業界、たとえば自動車業界や鉄鋼業界などにおいて、我々の分析機器は、世界中で高い評価を受け技術的に強い立場にある。強い領域で使われる製品は、強い領域故の厳しい要求に応じるため、必然的に強い製品に育っていくものである。現在、人類が抱える課題の一つに地球環境問題があり、日本の環境問題への対応が最も進んでいる。この領域においても、分析機器の果たすべき役割は大きく、技術の極限への挑戦がますます求められるであろう。

今後の我々のあり方の一つは、ハード技術の独自性を確立することである。過去、分析機器のハード技術の基本的なところは海外を中心とする先達たちのそれを学び、製品の最大の強みは品質であり価格競争力であった。しかしながら、これから我々が展開していこうとする領域においては、師となるべき先達はほとんど息切れして

いるように見える。これからは、我々自身が独自の技術を開発しなければならない。

独自の技術開発というのは決して効率のいいものではなく、多くの紆余曲折と無駄があるものと覚悟している。しかし、いくら効率が悪くても、独自で開発した技術での差別化ができてこそ、はじめて世界で最も強い分析機器メーカーになれるものとする。

次に重要なことは分析機能の拡大である。これまで分析機器に求められてきた機能は、ほとんどの場合、分析対象と分析機器との相互作用を正確に指示することが全てであった。ところが、いま求められているのは、分析対象を極端に微小化した局所的な領域の個別情報の把握や、反対に対象全体をさまざまな断面から分析・解析し総体としての情報を取り出すなど、いわば多様化した分析機能である。

分析機器のハードの開発から、分析対象をどう捉えるのか〔サンプリング〕、得た相互作用の結果をどう判断し処理するのか〔情報処理〕などがますます重要になってきている。このためには、我々メーカーは、ユーザーとの接点をより拡大し、相当の部分で相互乗り入れする必要がある。わが社では、この点を考慮した一つの試みとして、自動車計測試験用ラボを開設した。今後はさらに多くの領域にも、接点となるべき場を拡げていきたいと考えている。



代表取締役社長

大浦 政弘

理学博士

Masahiro Oura, Dr. Sci.
President